

年間第 29 主日 マタイ 22 : 15~21

「偽善者たちよ！」イエス様が、人を叱責するときによく使う言葉です。表向きと裏の本音にズレがあるときに怒りを込めて使っています。

今日は、その真意を考える前に、当時の税金についてのお話をします。紀元 6 年以降、イスラエルには人頭税というローマ帝国に納める税金が課せられました。この頃から、国粋主義の傾向が強めます。熱心党と言う革命勢力も生まれました。こうしたアンチ・ローマ的風潮の中で、人頭税は象徴的な役割を果たします。圧政者ローマに税金を払うことは、愛国者のすることではない、と言うことです。さらに、宗教的イデオロギーが付け加えられます。税金を納めるデナリオン銀貨には、皇帝の像と一緒に「崇拜すべき神の崇拜すべき子、カエサル・ティベリウス」と刻印されていました。つまり、税金を払うことは、「皇帝を神の子として崇める偶像崇拜の行為」だとしたのです。今日のやりとりの畏は、「税を納めよ」と言えば、律法に逆らうことを勧めることになります。「納めるな」と言えば、ローマ帝国への反逆を呼びかけたことになります。このような袋小路にイエス様を陥れようとします。

イエス様は、問い詰める人たちにデナリオン銀貨を持ってくるように命じます。1 デナリオンと言えば、今の 1 万円札相当に当たります。イエス様も弟子たちもそんなお金は持っていません。ファリサイ派の人たちは、万札で膨れ上がった財布の中から 1 枚を取り出します。彼らは、金持ちでした。その銀貨には、皇帝の像と銘が刻まれています。それを彼らに確認させてから、イエス様は言われます。「皇帝のものは皇帝に、神のものは神に返しなさい」

イエス様の言葉を解説するとこうなります。「あなたたちは、ローマ帝国との交易で恩恵に与って、財産を築いた。ところが、税の問題になると、急に愛国心や律法の話を持ち出す。それはおかしくないか？ ローマとの取引で恩恵に与って生きているのだから、税金も払うべきではないか？ お金に執着しているそんなあなたたちも、神様のものでもある。自分自身を神様にお返ししなさい。」イスラエルのエリートたちは、ローマと結びついて私腹を肥やしていました。彼らが、今更、貨幣の像に文句を言ったり、愛国心を振り回す資格などなかったのです。

ダブル・スタンダードという言葉があります。その時々で、見方や立場を変えてしまうことです。結局、自分の都合の良いように語ったり、振舞ったりすることです。その人たちからは、エゴイズムが透けて、真実は感じません。イエス様は、そのようなご都合主義に「偽善者よ！」と厳しく咎めます。私たちの中にも、偽善の種があります。

聖ヴィアンネはこう言います。

聖霊は、ものを拡大するルーペのように、善と悪を大きく拡大して見せてくださいます。神様のためにした小さな行為の偉大さが見えます。同時に、小さな過ちの大きさも見えるのです。聖霊の光によって、神様との小さな齟齬が大きく見えるでしょう。小さな罪にも恐怖を抱かせるでしょう。ですから、聖マリアは決して罪を犯されませんでした。聖霊は、聖母に悪の醜さを悟らせていたの

です。聖母は、ごく小さな過ちでも、身の毛をよだつほど怖れていました。(参考資料『聖ヴィアンネの精神』 モンナン神父・著 久保守訳 聖母文庫)

私たちは、ヴィアンネの勧めに従って、偽善の反対、悪を退け善を求めていきましょう。